

自称詞の歴史社会言語学的研究—「拙者」から「僕」へ— Modernization of Japanese self —from *Sessha* to *Boku*—

れいのるず秋葉かつえ

要 旨

この研究の目的は、中世から近世、近代はじめの800年間に書かれた書簡をデータにして、日本語自称詞の歴史的变化のアウトラインを描き出すことである。まず、中世は大陸言語との接触に刺激されて「私」「某」などの和語自称詞がいくつか創出されはしたが、漢語自称詞そのものはまだ使われることがなかった。中世は「和語自称詞の時代」であった。江戸期には徳川幕府の漢学奨励政策によって有文字人口が急増し、「拙者」を代表的な例とする漢語自称詞が学者、武士その他の識者たちの間に広く普及した。しかし、江戸中期には新たな漢語自称詞「僕」が出現し、和語自称詞と「拙者ことば」を中心にした自称詞パラダイム（権力原理タイプ）は、「僕」を主体とするパラダイム（連帯原理タイプ）にシフトしていった。「僕」は封建社会のタテマエが崩れた大状況に打ち込まれた楔の役割を担いつつ、幕末乱世を生き延びて近代を支え、現代日本語の主要な男性自称詞となっている。

キーワード：コードスイッチ、自称詞パラダイム、powersemantic 権力原理、solidaritysemantic 連帯原理

1. はじめに

欧米言語学研究においては、人称代名詞は比較的安定したカテゴリーで、歴史的に変化することが少なく、他言語からの借用もほとんど例がないとされてきた (Ruhlen 1994 : 252)。しかし、欧米言語以外の人称詞を観察すれば、代名詞の変化・借用の例はけっして稀なわけではないと論じる研究者も出て来ている (たとえば、Thomason & Everett 2001など)。日本語人稱詞は、歴史を通じてほとんど常に不安定であったし、近世の始めには大陸言語からの自称詞・対称詞の大量輸入も現象している。

この研究は、歴史社会言語学の立場から日本語自称詞の揺れと借用の歴史を書簡テキストから読み出す試みである。書簡の書かれた時代の世相、書い

た人の生まれや育ち、書簡の書かれたコンテキストなど、言語データ以外のさまざまな情報を参照していくと、漢語自称詞の大量借入も自称詞パラダイムの権力支配型から連帯志向型へのシフトも、社会変化の単なる反映ではなく、社会変革に実践的に関わる社会的な出来事であったことが見えてくる。

2. ダイグロッシアの変容

近世の始め、日本語の言語空間に画期的な変化が起こっていた。漢字・漢文との接触以来続いてきた漢-和ダイグロッシアが変容し始めたのである—きわめて薄かった漢文読み階層が厚みを増し、威信言語（漢言語）と俗言語（原日本語系）の重なり部分が下に広がっていくという形で。近世は、大陸言語と日本列島現地語という異質な言語がぶつかり合うごったがえしのなかで、切り分けられ、ふるい分けられ、混じり融合して、土着言語の統語構造を基礎にした一つの総合的な言語が形成されていった時代であった。

ここでは、自称詞変化に関わる二つの出来事—近世前中期の漢語自称詞の大量輸入と後期に現象した自称詞パラダイムのシフト—について『新撰書翰集』（三浦 1915）という小さな書簡集（以下『書翰集』とする）をコーパスとして観察し、日本語自称詞の歴史的アウトラインを把握したい。

漢語自称詞大量輸入は中世の終わりから近世にかけて始まり、最初は「拙者」「下拙」のような漢語自称詞（大雑把に「拙者ことば」とする）、「不佞^{ふねい}」など（「学者ことば」とする）が普及し、きわめて特殊な自称詞パラダイムができ上がっていった。さらに、江戸時代中後期になると、それまで見られなかった「僕」が学者たちの私的な書簡に現われ、やがて連帯^{solidarity}の自称詞としての意味合いを帯びるに至り、幕末乱世を生き延びて、近代日本語の主要な男性自称詞になった。江戸時代前期に輸入された漢語自称詞はすべて古語化・廃語化し、「僕」は現代日本語にのこる最後の漢語自称詞となった。

3. 書簡—歴史社会言語学研究データとして

言語変化の理論家、科学的な社会言語学の先駆者として知られるラボフは、「歴史的な文書は、たまたま保存されていたために入手できたもの」

であって統計学的に厳密な手続きによって選ばれたものではない、bad data (悪しきデータ)」だと言いきってしまった (Labov 1994 : 11)。しかし、日本語自称詞の場合のような、世紀単位、千年単位で進行している大きな変化の流れを展望する作業は、書かれた文書なくしては始まらない。

ここでは、書きことばと話しことばの機能的、構造的違いを意識しながら、過去に書かれた書簡をデータにする。書簡を書く行為は、対面的な会話行為と違って時空を隔ててはいるが、書き手と受取り手の相互作用であることに違いはない。書簡のやり取りは、書きことばのなかでは音声会話に一番近い言語行為である。〈自分〉に言及することば、相手に言及することばの頻度の高いジャンルである。各時代に自他の関係性がどう言語化されたかを観察しようとするなら、書簡は恰好なデータだと言えよう。

吉田松陰研究者の藤田省三 (1978 : 610) は、書簡について次のように述べている。

手紙は、「当人の感情と心理の極めて個人的 (私的) な記録であるとともに人間の関係の記録でありそれだけではなくて客観的世界との関係の記録でもある所に「手紙」の包含的性質がある。それは未分化で原始的な全体的記録である。手紙には必ずその人間の持つ感情と理解力と他人に対する態度と世界に対する態度とが何らかの形で不揃いなままで現れている。

書簡は、言語学の立場からも歴史研究の立場からも、きわめて重要な示唆に富む資料である。ここで参照する『書翰集』には、歌僧・西行法師が藤原定家へ書き送った歌合わせに関する書簡、源義経が大江廣元に宛てたとされる「腰越状」(12世紀) から始まって、福沢諭吉が実業家・中上川彦次郎に宛てて書いた「處世に関する主張」(19世紀) まで、およそ800年間に書かれた手紙167通が集められている。全漢文の書簡もあるが、漢文と和文のコードスイッチ文がほとんどである。序文に、採択に際しては書簡の「内容実質」に重点をおいたとある。たまたま保管されていた偶然、たまたま編者が重要

だとみなした偶然はむろん避けられない。しかし、小さな書簡集だからこそ限られた時間の中で徹底分析が可能だという利点もある。書き手や受取り手の伝記的背景も、多くの場合、詳細に調べ、書き出されている。彼ら個々人の書簡集も多数出版されている。必要なところは、それらの書簡集を「補足データ」として仮説の懸隔を埋めていくことにする。

4. 中世はまだ和語自称詞の時代であった

『書翰集』に収められた167通の書簡（各書簡に番号が振られている）には自称詞が706例ある。これを（i）「固有名自称詞」、（ii）「和語自称詞」、（iii）「漢語自称詞」に分けると表1のように整理できる。

表1 『書翰集』に使われた自称詞

	例数	出現形
固有名	9	「直實」（熊谷直實）、「日蓮」、「光圀」、「孝」（木戸孝允）
和語	423	私、私方、私儀、私事、私輩、私共、 ^{わがともがら} 吾輩、 ^{わがはい} 我輩、わ（が）、われ、われら、われわれ、やつがれ、 ^{それがし} 某、ここもと、此方、此者、手前、わらは、みずから、己、身、わがみ
漢語	242	臣、予、拙、拙夫、拙子、拙方、拙儀、拙者、拙者事、拙者共、下拙、拙老、老拙、愚拙、愚老、老朽、老朽儀、弟、小弟、愚弟、野弟、自分、自身、下愚、拙陋、野生、不佞、老人、僕、僕輩、卜、小生、小生儀、小子、小輩
計	674	

『書翰集』の原文では、「^{わがともがら}吾輩」「^{わがはい}我輩」「^{われら}吾儕」のように複数の読み方がある場合をのぞいては一般にルビはない。なお、「私方」「私儀」「拙者事」「私輩」のように、自称詞に「-方」「-儀」「-事」「-輩」が付加されてフォーマリティが加減されている例を自称詞とするのは適切でないという見方もあるが、ここでは、それらを一種のヴァリエーションと考え、そのまま表示した。「-方」「-儀」「-事」「-輩」は、それ自体で独立して用いられないから、文法的には接尾辞のようなものである。「-儀」「-輩」は、漢

文にも古くからあったもののようで、これらの自称表現はまさに「混種語」というべきだろう。語形成^{morphology}レベルでも和-漢混合が起こっていた例として興味深い。語の中心要素が和語のものは和語自称詞とし、「拙方」「拙者事」「拙者共」のように語の中心要素が漢語のものは、漢語自称詞として扱った。

「固有名自称」とは、書き手が自分自身の名前をそのまま使って自分自身を指す自称法で、古い時代にはよく使われたようである。たとえば、日蓮上人(1222-1282)が佐渡に流されていく前夜、土牢に押し籠められた弟子の日朗に宛てた書簡([書簡11])がある。書き出しの「日蓮は明日ははや佐渡の国へ参るなり」の「日蓮」は、日蓮の自称である。固有名自称がどのような社会的意味合いを帯びて使われたのか、ここでは深く立ち入らない。

自称詞例トータル674のうち70例は女性の手紙に現われたものである。書き手の数が少ない(20人)こと、自称詞の種類が限られている(「私」「わが身」「われ」「自ら」「我々」「わらは」)ことなどから、女性自称詞を、男性自称詞と一緒に扱うことには問題があると思われるので、女性自称詞は、この研究でのカウントから除外した。さらに、最高支配者に向かって直属の部下がものを言う、あるいは、書く時に使う自称詞「臣」—信長の老臣が切腹を覚悟で主君信長に送った「死諫の書」([書簡16])に3例ある—も除外すると、男性自称詞601例が残る。これらの自称詞を、中世、江戸前期、江戸後期に区分して、時代ごとに整理すると、次ページの表2が得られる。

鎌倉時代から宮本武蔵(1584?-1645)([書簡27])の前までの26通を「中世」、宮本武蔵から狩野^{えきさい}えきさい 掖齋(1775-1835)([書簡95])の前までの67通を江戸前期、掖齋以降73通を江戸後期としてカウントした。この区切りは便宜上のもので、宮本武蔵が「拙者」の創出者だとか、「僕」を使い出したのは掖齋だとかいう意図はまったくない。言語は、相互作用のなかで実際に使われ周囲に同意されることによって変化するものであり、特定の創出者を確認することなどできない場合が多い。江戸時代初期、宮本武蔵がこの手紙を書くような時代に「拙者」が武士たちの間で使われるようになっていた、江戸中後期、掖齋のような学者がほちほち「僕」を使い始めていたというようなことは目安にしていだろうと思う。

表2 『書翰集』における男性自称詞—3期に分けて

	固有名	和語	漢語	計
中世	4	27	0	31
江戸前期	3	135	108	246
江戸後期	2	191	131	324
計	9	353	239	601

『書翰集』には中世の書簡は少ない。少ないこと自体が中世的である。武将の妻、母など女性の書簡もあり、手紙による表現がかなり広がっていたであろうことは察せられるが、まだ識字率が全体に低く、漢文や漢語混じりの手紙を流暢に書く能力をもった者はむしろ例外であった。中世武士の大多数は、まだ漢文が読めなかったし書けなかった。文化一般に縁がなかった。そういう意味で中世の武士一般は無文字大衆と大差なかった。少数の支配者を除けば、文字学習のゆとりはなく、中下層の武士たちが高位言語の漢文を習得するようになったのは戦国時代の終わりであった。楠木正成、伊達政宗、徳川家康、加藤清正、木村重成など、みんな和語自称詞の「我」「某」「手前^{てまえ}」を使っている。漢語自称詞はない。中世は和語自称詞の時代であった。

5. 江戸前期は「拙者ことば」の時代

近世（江戸期）になると漢語自称詞がぐっと出てくる。和語自称詞と漢語自称詞が全部で562例あり、うち漢語自称詞は前期後期合わせて239例ある。漢語自称詞が4割以上になっている。中世から江戸期にかけて画期的な自称詞変化が起こっていたことがわかる。漢語自称詞の大量借入である。「わたくし」「それがし」など中世の和語自称詞の外に、中世には見られなかった「拙者」「下拙」「拙夫」「愚拙」「拙老」のような「拙者ことば」や、「不佞」等の「学者ことば」など、漢語自称詞が使われるようになった。

同時に注目しておきたいのは、中世には、わずかずつではあったが、文字学習が中下層に広がり、有文字階層と無文字階層の格差が縮小しはじめていたことである。そして近世、武士の支配が定着し、武士を最上位に位置づけ

る身分制度を基盤にした幕藩封建制度が確立した頃には、日本社会は顕著な文字社会に移行していた。民衆の社会生活のシステムのうちに文字の使用が当たり前のように組み込まれている社会、文字を知らなければ不利益を受ける社会に変化したのである。そうして、「江戸時代は、日本史上初めて文字文化が庶民にまで行き渡った時代になった」（加藤 2006：190）。下級武士たちも、大衆も、お互いの中で手紙を書くようになっていった。たいていは、やがて和漢混交文のもととなる漢-和コードスイッチ文であった。

短期間のうちに手に余るほど多数の自称詞が入って来たわけだから、一つ一つの自称詞がどんな意味をもち、どう使われるべきか、使い手たちにもよくは分らないまま、広がっていったのだろう。しかし、『書翰集』から見るかぎり、「拙者」が漢語自称詞の主流であった。以下、「拙者」を中心に観察を進めていくことにしたい。

『書翰集』において「拙者」が最初に現われるのは宮本武蔵の書簡（〔書簡27〕）である。書かれた正確な年は分らないが、内容から言って武蔵晩年1640年代の書簡に間違いない。細川家の客分としての待遇を受けていた武蔵が、「拙者年久敷病氣故」と引退を願い出た書簡である。続いて大石内蔵助（1659-1703）が討ち入り前に知友に送った書簡3通（〔書簡32-34〕）に合わせて6例の自称詞がある。すべて「拙者」である。

しかし、「拙者」は武士だけが使う自称詞であったのではない。『書翰集』には江戸前中期儒学者の書簡が18通所収されている。漢語自称詞がまだまれにしか使われなかった初期の学者中江藤樹の2通、新井白石の2通、荻生徂徠の2通を除くと、すべての書簡で「拙者」が多用され、「拙夫」「愚拙」なども使われている。

たとえば、太宰春臺（1680-1747）が服部南郭（1683-1759）に送った「詩の聲律を論ず」という長文の書簡（〔書簡63〕）には、「拙者」14例、「愚拙」8例が使われている。出てくる順に並べると、次のようになる。[拙者-拙者-拙者-拙者-愚拙-拙者-拙者-愚拙-愚拙-拙者-愚拙-愚拙-拙者-拙者-愚拙-拙者-拙者-拙者-愚拙]。儒学のほかに、天文、地学、漢詩にも熱心であった春臺が、儒者でもあり、漢詩人、画家でもあった南郭相手に

熱烈な漢詩論をやっているのである。

そこで興味深いのが俳諧人の「拙者ことば」である。芭蕉の弟子榎本其角（1661-1707）の書簡（〔書簡48〕）に「下拙」があり、のちに俳句界に新風をもたらしたとされる谷口（与謝）蕪村（1716-1784）の書簡（〔書簡77、78〕）に「愚老」が2例ある。芭蕉の自称詞例がほしいが、『書翰集』には芭蕉の書簡が1通しかない。それも50字ほどの短い借金申込み書簡で、自称詞は和語の「我等」が1例あるのみである。そこで、芭蕉が俳友や弟子に送った書簡141通を収めた『芭蕉書簡集』（萩原1931）の自称詞を観察した（表3）。

表3 『芭蕉書簡集』における自称詞

我	我が	私	此方儀	手前	予	拙者	愚	愚身	愚老	計
7	2	2	1	1	3	25	1	1	8	51

複数形の自称詞「我等」8例を除くと、自称詞は全部で51例。うち半数が「拙者」である。

芭蕉の父親は、正式に「松尾」という姓をもつ家柄ではあったが、身分は農民であった。芭蕉自身も、10代の終わりごろから武家に仕えはしたけれど、数年で辞めて俳句の修行に出ている。小森（2013：166）によれば、俳諧師とは「土農工商という身分制の外に位置する世捨て人」、つまり、「方外」であった。僧侶、医師、画工、儒者なども方外とされる。

『書翰集』に近松門左衛門（1653-1725）の書簡が2通ある。和田忍笑という近松ファンに宛てた書簡（〔書簡50〕）に「拙老」が1例、宛名不明の書簡（〔書簡51〕）に和語の「我等」がある。近松も武家に生まれ、公家に仕えたこともあるというが、歌舞伎作家は方外であろう。

才能ある方外衆の自己意識は時に並みでなかった。たとえば、葛飾北斎（1760-1849）がいる。本所割下水（現・東京都墨田区）の一角で貧しい百姓の子として生を受け、幼くして、幕府御用達鏡磨師であった中島伊勢の養子となったが、のち、実子に家督を譲り家を出る。その後、貸本屋の丁稚、木版彫刻師の徒弟となって労苦を重ね、実家へ戻る。この時、貸本の絵に関心

を持ち、画道を志す。『書翰集』に北斎の書簡が1通ある（〔書簡129〕）。天保6年、書店の店主3人に宛てて書かれたものであり、「人物一人」につきいくら支払ってもらいたい旨をのべたもの。自称詞は「老人-老人-老人-老人」である。「愚老」でも「老拙」でもない、ただの「老人」である。絵師北斎はこの年60代半ばを過ぎている。たしかに老人である。表1では、この「老人」を漢語自称詞としてリストに入れたが、「老人」を自称詞として用いた例はこの書簡集には他にはない。前例が大陸言語にあったのだろうか。それとも、公定の身分秩序からはみ出した北斎の創作自称詞だったのだろうか。書簡は、「前北斎事畫狂老人乞食坊主ぜんほくさいことがまようろうじんこじきぼうずまんじ 九拜」というサインで締めくくられている。「畫狂老人」「卍」は、およそ13年打込んで『富嶽三十六景』を仕上げ、続けて『富嶽百景』に取り組みはじめた時から使いはじめた号である。60歳といえども、ぶっ続けに大作に取り組み、さらに次のプロジェクトに着手したばかりの北斎がただの「老人」を自称詞にし、「畫狂老人」「卍」を名のる。身分秩序どころか、言語規則にさえも縛られたくない、自由への意識が溢れ出ている。「あと10年生きられればもっといい画が描けるだろう」と言いつつ90歳で逝ったという天才画家にぴったりする自称詞はなかったのかもしれない。彼は号を30回変えたという。

世の中が「武」から「文」に移行していく現実の中で、新しい学問や芸術が生まれ、新しいキャリアが可能になっていた。同時に、自称詞にも一つの重要な変化が起こっていた。江戸前期書簡ではマジョリティだった「拙者」の影が薄れて、「僕」の時代がやってくる気配があった。

6. 自称詞パラダイムの揺れ

江戸時代前期から中期にかけて儒者、俳諧師などの方外衆が「拙者」を多用する傾向があったことを示す例を上であげた。しかし、後期に近づくところの傾向は下火になる。まず、荻生徂徠晩年の門人儒学者であった宇佐美瀧水うさみしんすい（1710-1776）の書簡（〔書簡64〕）に、「小子」が1例出てくる。『書翰集』では初めての例である。なぜ儒学者が「小子」を使ったのだろうか。

この頃、オランダ学と並んで、国学が立ち上がっていたが、国学者たち

の自称詞もこれまでの学者たちとは違っている。賀茂真淵（1697-1769）の書簡（〔書簡73〕）に「小子」4、「拙子」1、「拙」2、「己」1、本居宣長（1730-1801）は「愚老」3。平田篤胤（1776-1843）から伴信友（1773-1846）宛ての「学問上の相談、身上のぶちまけ咄」と題する長文（〔書簡75〕）には、44例の自称詞が使われているが、漢語自称詞は、「予」13、「小弟」10、「野弟」2、「愚弟」2、「弟」1、「小子」1、和語は、「吾」12、「私」2、「我」1となっている。「拙者」はない。

国学は、『古事記』『万葉集』などの古典に基づいて文献学的・実証的に古代日本の思想・文化を明らかにしようとする点では、科学的な学問態度であるが、儒教の影響を受ける以前の古代の日本を明らかにしようとする点では、復古的な学問であった。辻村（1968）によれば、「小生」は平安時代に使われていたという⁽¹⁾。「小生」「予」などが、平安時代から貴族によって使われた自称詞だったとすれば、武士、儒学者、俳諧人、その他の間で「拙者」ことばが流行していた江戸前中期にも貴族など少数によって使われていたかもしれない。それが復古主義的な国学者たちを中心に息を吹き返した…？新しい学問を立ち上げた指導者たちが自分たちに相応しい自称詞を手探りしていたとも考えられる。自称詞パラダイムの揺れである。

7. 「僕」の日本語化

江戸中期俳人画家・谷口（与謝）蕪村（1716-1783）が門人に宛てた書簡（〔書簡79〕）に次のような形で現われるのが『書翰集』に見られる「僕」の最初の例である。全体としては漢文コードと和文コードが半々程度に混じった漢-和コードスイッチ文で書かれている（現代語訳は、筆者れいのるずによる。引用例文中の漢字は、原典どおり旧漢字、旧仮名づかい。現代語訳では、新漢字を使った）。

例1：折節^{をりふしきとう}几董^{みあは}百池など居合せ候て、いづれもへ吹聴^{ふいちやう}いたし候處、みなみな^{かんしやう}感賞仕候。於^{いえつ}僕^{わが}悦乃^{えつ}至りに御座候。〔書簡79〕

〔送られた発句についてのコメント〕 ちょうど几董や百池も居合わせ

たので、両者に吹聴した所、みんな感心致しました。僕も、この上なく喜ばしく存じております。)

「於_レ僕」は、形から言えば、漢文コードである。その前の高井几董^{たかいきとう}（1741-1789、門人）に宛てた書簡（〔書簡77〕）と俳友宛ての書簡（〔書簡78〕）では「愚老」が用いられている。蕪村より半世紀以上前、蕪村の尊敬する芭蕉が「拙者」を常用していたことを考えると、「於_レ僕」は、蕪村の意識が何かに向かって動いていることを示唆していると言えないか。当時の墮落した俳諧を、芭蕉の頃のような格調高いものに戻そうとしていた蕪村の書簡にこのような形で「僕」がふっと現われた事実は、漢語自称詞の日本語化メカニズムを考える上で見落とせない。蕪村は、漢文、和文のバイリンガルであったはずだから、どこかで漢文書簡中の「僕」にであっていた可能性はある。和語コードも漢文コードも常に頭にあっただろう。彼の意識のうちに、俳句界の現状への不満があったのだとすれば、「拙者ことば」にも齟齬を感じていたのではないか。俳句仲間宛てた私的な書簡で無意識のうちに漢文コードの「於_レ僕」にスイッチしてしまったとしても不自然ではない。

上下尊卑の厳しい社会で広がった「拙者ことば」は、基本的に権力原理の自称詞であった。使用人口が増え、使用場面が広がることによって、権力的な意味はだんだんに薄れるかもしれない。しかし、身分秩序が現実に社会全体の日常生活を支配しているかぎり、「拙者ことば」の権力臭が完全に抜けるまでには時間がかかる。町人芸術が盛んになり、大衆が自由な表現を求める時代、相手との対等な関係にたつことを許容する新しい自称詞が必要だった。

「僕」^{ぼく}がまぎれもなく日本語自称詞として使われている例が出てくるのは、江戸時代後期の考証学者（今日の書誌学・文献学）狩谷掖斎（1775-1835）の書簡（〔書簡95、書学の論〕）においてである。蕪村から半世紀ほどたっている。

例2：御存の通り、僕も志^の而^み己にて寸隙無_レ之、稽古も致不_レ申故、何とも御挨拶^{ごあいさつ}に及かね候得共、…〔書簡95〕

(ご存知の通り、僕も志のみで時間がまったくなくて、稽古もしない
でおりますので、どう御返事していいかわかりませんが、…)

所々に漢文フレーズが入っているが、全体としては和文が主体で現代日本語文に非常に近い。「於_レ僕」がいかにも漢文コードらしく見えるのに対して、この例文中の「僕も」は完全に和文コードである。続いて屋代弘賢(1758-1841)の「僕」1例、家里松濤(1827-1863)の「僕」7例が観察される。このころには、「僕」が日本語化していたと見るのが妥当であろう。

8. 身分制度の矛盾の中で一渡辺華山の「僕」

『書翰集』の自称詞例から、「僕」が江戸後期の書簡で日本語に転化したことがなんとか見えてきた。問題は、<なぜ「僕」が好んで使われるようになったのか?>であるが、『書翰集』は、そうした問題に答えられるだけのサンプルをもっていない。ここでは、『書翰集』には収められていない渡辺華山の書簡から手掛かりを得たい。『日本思想大系55』の「華山書簡」12通と『華山書簡集』(小沢耕一編)243通を参考にした。以下では前者を「華山書簡-I」、後者を「華山書簡-II」とする。

渡辺華山(1793-1841)は、田原藩重役というれっきとした武家の生まれである。しかし、封建制度が行き詰まり、飢饉が続いた時代、田原藩のような小藩は、財政的に相当困難に陥っていた。武士たちは禄さえ十分に貰えなかった。華山が画家を志したのも家計を助けるためであった。20代半ばで画家として生活できるようになるが、年寄り役として藩に対する責任も重かった。画業に専念したいと辞職願いを出したこともあったが、そんなことが簡単に受け入れられる状況ではなかった。洋学者でもあり、開明のリーダーでもあった華山は、「蛮社の獄」で逮捕され、田原藩内に蟄居を命じられ、貧困と孤独のなかで自殺した。49歳であった。

身分制度が急速に崩壊しつつあった状況のなかで、多くの武士が古いシステムと新しい思想の板挟みになった。渡辺華山は、その一人であった。華山は武士の身分に未練はなかったが、脱藩は大罪であった。武士と画家のダブ

ルを生きざるをえなかった。華山は、信頼できる画友、理解してくれる蘭医に、憂苦を訴える書簡を何通も書いている。彼の告白的な書簡の自称詞は、「私」でも「拙者」でもない。「僕」である。

「華山書簡－Ⅰ」は、多数ある華山の書簡から12通だけ選択されたものである。表4は「華山書簡－Ⅰ」のすべての自称詞のカウント結果である。連体格の「吾が」「我が」は除いてある。

表4 「華山書簡－Ⅰ」の自称詞

自称詞	私	僕	小生	我輩	拙生	予	計
例数	42	39	4	3	1	1	90

「私」以外の自称詞では「僕」が飛び抜けて多い。それぞれの自称詞が誰に宛てた書簡に使われたかを見ると、さらに興味深い事実が見えてくる。「僕」39例のうち、37例が椿椿山ちんちんざんに宛てた4通の書簡に、2例が鈴木春山しゅんざん宛ての1通の書簡に使われているもので、他の書簡には「僕」がない。

画家の椿椿山は、華山が信頼し、尊敬し、もっとも打ち解けることのできた友人であった。華山にとっては門下生というより尊敬できる画友であった。初め2通は蛮社の獄で逮捕された時の獄中書簡であり、そこには「僕」はない。あとの2通は「絵事御返事」と付記されているもので、絵事について椿山が質問し、華山が答えるという形式の別紙が附されている。田原へ護送されておよそ一年、幽居中の華山が絵画について心ゆくまで書き出した長文である。江戸を離れて知的な話し相手のいない田原で鬱々とした日々を送っていた華山にとって椿山との文通ほど有り難いものはなかっただろう。

華山が信頼したもう一人、鈴木春山は、田原藩の藩医であった。長崎で西洋医学を修めた蘭学通でもあり、高野長英と共著でオランダ語の翻訳も手がけていたことから、華山と対外政策について考えが一致していた。田原藩士として、蘭学者として、華山のよき理解者であった。「華山書簡－Ⅰ」では例が十分でないが、「華山書簡－Ⅱ」に春山宛書簡が7通ある。書簡の内容によって違いがあるのはむろんだが、私的な事柄を論じている「華山書簡－

II-42」には自称詞が17例あり、すべて「僕」である。

田原藩内にも華山が信頼した武士がもう一人いた。真木重郎兵衛定前である。真木は、華山より4歳年下の田原藩用人で、藩政改革について華山と常に協力し、藩に尽くした。「用人」とは、家老の次に位し、庶務会計にあたる重職である。藩の財政難を誰よりも熟知し、常に華山の意見を求めてきていた。「華山書簡- II」に、真木宛ての書簡が33通ある。自称詞は、内容によって「私」「我」「予」「僕」が使い分けられている。「復統について論ず」と題する書簡（華山書簡- II-20）では自称詞9例すべて「僕」。それに対する真木の返信も、自称詞6例すべて「僕」である。真木も、華山の自殺から2年後、継嗣問題のもつれを解決するため、藩主を諫める書き置きを遺して自殺した。

華山が自称詞「僕」を使って手紙を書いた相手は多くなかった。上記3人の外、愛弟子たち（高木梧庵、金子健四郎）に「僕」を使って思いやり深い内容の書簡を書いてはいるが、その他の書簡では、「僕」を一切使っていない。「僕」は、武士の身分から抜け出ることを許されなかった画家・開明家としての華山の、心から信頼できる知友にだけ向けられた友愛のしるしであったと考えられる。

「僕」が中国大陸においてどのような機能をもって使われていたか詳しくは分らない。Pullyblank (1995: 192) に <pu 僕 ‘your slave’—used between equals (対等の者にたいして使われた)> とある。古典中国語に造形の深い言語学者 YC Lee (現ハワイ大学名誉教授) によれば、領主の家で一番下の位にある家僕たちがお互いのあいだで使った自称詞であったという。下層階級の対等な間柄で使われた謙譲の自称詞ということだったのであろうか。Brown & Gilman (1960) が二人称理論で提案した概念—power semantic (パワー原理) 対 solidarity semantic (連帯原理) を、自称詞に適用してみるなら、「僕」は連帯志向の自称詞であったと言えるだろう。

9. 草莽志士の運動—吉田松陰の書簡

華山が切腹したのは1841年、アヘン戦争2年目の年であった。ヨーロッパ

列強が次々に日本に近づこうとし、1853年にはペリーの黒船が浦賀に来航、日本は幕末動乱の時代に入った。そんな状況のなかで、倒幕運動に傾倒していった一人が吉田松陰であった。松陰の伝記作家の一人が最初に「僕」を自称詞として用いたのは松陰らしいと述べているが⁽²⁾、すでに見てきたことから分るように、松陰は「僕」の innovator ではない。しかし、そういう印象を与えるくらい「僕」を多用し、「僕」を広げた人であった。

日本語自称詞パラダイムの近代化を語る時、吉田松陰の自称詞に言及しないわけにはいかない。幕末動乱期の書簡の日本語は、新旧入り乱れて、もはや『書翰集』にもとづいて自称詞に何が起こっていたのかを見通すことが難しくなっている。松陰の書簡が4通〔書簡525、528、529、530〕取り上げられているが、どれも妹たちに宛てたもので、自称詞は10例すべて「拙者」である。処刑覚悟の松陰が武士である兄として、いわば、遺書を書くような気持ちで書いた書簡である。しかし、以下で見るように、松陰はほとんど「拙者」を使わなかった。『書翰集』の例からは、思想家としての松陰の全体は見えてこない。

補足データとして『日本思想大系54吉田松陰』の「書簡」部分（以下「松陰書簡」）を選んだ。松陰は、校注者の藤田省三が「主著は書簡であった」と言うほど多くの手紙一時には信じられないほど長い手紙一を書いてきた。「松陰書簡」には家族、師、藩重役、友人、同志、学門思想上の友人、門下生60人に宛てた245通の書簡が収められている。その自称詞のすべてを取り出して、どんな自称詞がどのくらいの頻度で使われたか、どんなコンテキスト—受け取り手、受け取り手との関係、コード（漢文か和文か）—で使われたかをできるかぎり数量的に見ていった。その結果から、「僕」が近世から近代への繋ぎ目で重要な役割を果たしていたことが見えてきた。分析結果については別稿（Reynolds 2005、2014）で報告しているので、ここでは、その要点だけを紹介して、本稿のまとめにしたい。

全書簡245通のうち、受け取り手が不明なものを除き、残り222通を分析した。家族宛ての書簡をA類、家族外部宛ての書簡をB類とした。家族宛ての書簡と家族外部に宛てた書簡では自称詞の使われ方が異なるからである。A

類書簡は、全体として漢文か漢文調の「改まった感じ」を与える文体で書かれていて、新しい自称詞「僕」がほとんど使われていない。B類書簡では、和文コードの多いコードスイッチ文が著しくなり、自称詞の大半が「僕」である。ここではA類書簡を省略し、B類書簡自称詞のカウント結果だけを表5に示した。154通の書簡は、長州藩人33人（藩士30人、足軽3人）、松下村塾門下生12人（藩士10人、庶民門下生2人）、藩外部17人、合計62人に宛てられている。

表5 松蔭B類書簡に使われた自称詞

自称詞	僕	われ	小生	余	我が輩	固有名	拙生	拙者	私	劣生	生	我身	合計
例数	380	149	91	43	20	15	10	9	7	2	1	1	728
%	52.20	20.47	12.50	5.91	2.75	2.06	1.37	1.24	0.96	0.27	0.14	0.14	100.00

表5に見る通り、「僕」が著しく多く、「拙者」はきわめて少ない。藩の重役か役人に宛てた書簡に使われているだけである。

なぜ松蔭はこんなにも多くの相手に宛てた手紙で頻繁に「僕」を使ったのだろうか。

Brown & Gilman (1960 : 189) は、連帯原理の核は「お互いに like-mindedness (同じ考え方) をもっていることを発見し、それを維持強化していこうとする意図をもって行動するところにある」と論じている。その意味で華山と椿椿山、鈴木春山、真木重郎兵衛とのそれぞれの関係は、連带的であり友愛的である。しかし、連帯の根拠が「個人的」である。

松蔭と、松蔭が「僕」を使って書いた何百通もの書簡の受取り人たちとの関係もまた連带的である。しかし、松蔭をめぐる連帯関係は、華山の場合と違って、個人的心情的友情にとどまらない。今中寛司 (1982 : 192) は、尊王攘夷という政治的態度が連帯の力になっている「志士の連帯」であると言う。260年続いた武家中心のタテ社会が急激に自由と平等を原則にした近代民主

社会に転換する過程で現象した連帯であった。中世から引き継がれてきた武家文化のなかで、武士としての名誉のために死ぬことを訓練されてきた者たちの連帯であった。「個人的友情」は、せいぜい数人の相手としか維持できないが、「志士の友情」は社会に開き、無限の相手に向かう。

IT革命の進んだ今日、インターネットによる情報発信がジャスミン革命やオレンジ革命を可能にしたが、幕末の日本では、吉田松陰が書簡による草莽志士たちのネットワークングを行なって変革を推進しようとしたのだ。書簡が当時のハードウェアだった。日本語における最初の連帯型自称詞「僕」を社会に広げ、ネットワークングという変革戦略を実践した点で、松陰は近代的な革命者であった。

注

- (1) 出典として藤原明衡による『明衡往来・上』(別名『雲洲消息』(平末期)が示されている。貴族間の書簡模範集であろう。
- (2) 古川(1990)に「僕という謙称」と題する節があり、最初に「僕」を自称詞として用いたのは、どうやら松陰らしいと思われる、とある。

引用文献

- 今中寛司(1982)『日本の近代化と維新』ペリカン社
- 加藤徹(2006)『漢文の素養—誰が日本文化を創ったのか?』光文社新書
- 小森陽一(2013)「芭蕉への言葉の水路」『すばる』1月号 pp.164-171 集英社
- 辻村敏樹(1968)『敬語の史的研究』東京堂出版
- 古川薫(1990)『幕末・維新の群像 第11巻 吉田松陰』PHP 研究所
- 藤田省三(1978)「書目撰定理由—松陰の精神的意味に関する一考察」『日本思想大系54 吉田松陰』pp.597-621 岩波書店
- Brown, R. and Gillman, A. (1960) The Pronouns of Power and Solidarity. In Sebeok, T.A. (ed.) *Style in Language*. pp. 253-276. Cambridge: MIT Press.
- Labov, William (1994) *Principles of Linguistic Change Volume I: Internal Factors*. Oxford: Blackwell.

- Pullyblank, Edwin G. (1995) *Outline of Classical Chinese Grammar*. Vancouver: UBC Press.
- Reynolds, Akiba Katsue (2005) Boku in Edo Epistolary Texts. In Ochner, Nobuko and William Ridgeway (eds.). *Confluences: Studies from East to West in Honor of V.H. Viglielmo*. pp. 248–258.
- Reynolds, Akiba Katsue (2014) Calling for Anti-Shogun Movement—Inventing Modern Self in Letter Writing. *Journal of Foreign Languages, Cultures and Civilizations*, 2(1), pp. 55–64. American Research Institute for Policy Development.
- Ruhlen, Merritt (1994) *On the Origin of Languages: Studies in Linguistic Taxonomy*. Stanford University Press.
- Thomason, Sarah G. & Daniel L. Everett (2001). Pronoun Borrowing. *The Proceedings of the 27th BLS Annual Meeting*. pp. 301–316. BLS, Berkeley.

観察対象に選んだデータ

- 三浦理編 (1915) 『新撰書翰集』 有朋堂
- 萩原霸月校訂 (1931) 『芭蕉書簡集』 改造文庫第2部第167
- 小沢耕一編 (1982) 『華山書簡集』 国書刊行会
- 『日本思想大系54 吉田松陰』 (1978) 「書簡」 pp. 1-392 岩波書店
- 『日本思想大系55 渡辺華山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本佐内』 (1971) 「華山書簡」 pp. 105-158 岩波書店

(Katsue Akiba Reynolds)

(2018.11.28 受理)